

即興型ディベート

研究報告集

Research Report of PDA Conferences

オンライン開催

2023年8月4日（金）



一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会

Parliamentary Debate Personnel Development Association (PDA)

目次

【即興型ディベート研究報告集】

はじめに ～「論理・表現」2年目、即興型英語ディベートの活用～
大阪公立大学／一般社団法人パラメンタリーディベート人財育成協会 中川智皓

No.1 長野県屋代高等学校即興型ディベート研究報告書
長野県屋代高等学校 青木 郁子 教諭

はじめに

～「論理・表現」2年目、即興型英語ディベートの活用～

大阪公立大学 工学研究科 中川智皓

(一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会 (PDA) 代表理事)

今年度で10回目となる夏合宿は、昨年に引き続き、中学生・高校生・教員が参加するオンラインでの開催です。特に、中学生の即興型英語ディベートへの参加が増えてきています。高等学校では、英語科での新科目「論理・表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」が始まり、2年目となりました。文部科学省学習指導要領には、当該科目においての活動の一つとして、ディベートが明記されています。PDAでの体験会や合宿、大会で取り扱っている即興型英語ディベートは50分(1単位)で完結する形式で設計されており、上記授業においても活用されている学校があります。教育委員会や各地域での英語部会における教員研修にも本PDAのフォーマットが取り入れられています。ゲームの特性を活かした本ディベートの実践形式は、ルールに基づいて、議論がかみ合いやすい工夫がなされています。補助教材であるスピーチシートやそれに対応するフローシートなど、ルールに従うことでコミュニケーションが図りやすい形となります。私は昨年より1年間、カリフォルニア大学バークレー校にて在外研究の機会をいただきました。カリフォルニアでは、小学校、中学校、大学、アダルトスクールにて、ディベートの授業をさせていただく機会がありました。その中で感じたことは、日本の生徒、教員はきちんとルールを守る傾向にあるということです。わかりやすいディベート、スピーチにするためには、ルールに基づいて話すことが重要になります。その点で、英語が得意ではない日本人でも、しっかりとルールに従ってわかりやすい構成でスピーチを進めることで十分に他国の人とディベートという土俵で議論できます。

また、「論理・表現」の科目にも示されるようこれからは英語力のみではなく、“英語力+内容”を評価する時代になると考えられます。PDAでは、英語力に加え、内容を評価するパーラメンタリーディベート検定[®](PD検定[®])を実施します。本年は一般向けにPD検定[®]が公開実施されます。PD検定[®]では、実際にディベートの実践を行い、内容と表現の両面からスコアが導出されます。スコアに応じたPDレベルを設定しています。PDレベルは論理的表現力となりますが、言語運用動力であるCEFRとの対応も参考に示しています。さらに、スコアやPDレベルの結果表示に終わるのではなく、今後の学習につながるよう、スピーチのよかった点・改善点をコメントしています。普段の学習の成果を測る一つの指標また今後の学習アドバイスとして、広く活用されることを願っています。

謝辞 公益財団法人 日本財団、公益財団法人 KDDI 財団、文部科学省、大阪公立大学ほか、多くのご支援をいただきました。ここに感謝の意を表します。

※ここでは、パーラメンタリーディベートを通常授業(50分)に導入できる形式にアレンジしたものを、なじみやすい・理解しやすい表現として、即興型英語ディベートと呼んでいます。

日本の一般的な生徒が実施できる形式に、「システム」として落とし込んだ点が特長です。ルールやスピーチシートをはじめとする考案したシステムは、単に一般的なパーラメンタリーディベートを簡素化したという位置づけではなく、議論の仕組みを整理し、教育的効果を高めるためのデザインが組み込まれています[1]。[1] 中川智皓、山内克哉、新谷篤彦、パーラメンタリーディベート(即興型英語ディベート)における議論の整理と評価の一考察、システム制御情報学会誌、Vol.32, No.12, (2019), pp.446-454.

即興型ディベート研究報告集

青木 郁子

長野県屋代高等学校

(1)はじめに

本校ではSSHの第5期に入り、国際情報という科目でディベート教育に力を入れてきた。1年次はSDGs Core英語長文(三省堂)のテキストを使用し、背景知識や英単語の学習をしながらディスカッションを行い、1月～2月にかけてディベート月間を設けてディベートを3回行った。2年次には年間6回のDebate Dayを設けてパフォーマンステストとして評価を行っている。

(2)実践内容【ディベート月間】 1年次1月10日～2月12日

1時限目 JTE がディベートのルールやそれぞれの役割を説明して、ペアワークで簡単な反論の仕方を学ぶ。PDA の即興型ディベートの紹介ビデオを見せる。

2時限目 生徒を12グループに分け、3人×8グループ、4人×4グループに分けて即興型ディベートを行う。4グループはジャッジにまわり、司会進行、撮影、タイムキーパー、ジャッジをする。

※準備時間の中にジャッジはPDA ジャッジの仕方のビデオを視聴する。

※ジャッジはフローシート、ディベーターはスピーチシートを提出する。

※ジャッジの1人はディベートをiPadで撮影し、Google Classroomに提出する。

1st topic : Yashiro High School should introduce school uniforms.

3時限目 前回と別のグループがディベートをする。

2nd topic : Smartphones bring harm than benefit.

4時限目 前2回とは別のグループがディベートをする。

3rd topic : We should introduce plastic (packaging) tax.

※各生徒がディベート2回、ジャッジ1回を経験する。

※勝敗はジャッジの vote の多い方を勝ちとし、個人の評価は生徒ジャッジの評価の平均点とする。

※教科の成績に反映する上で教員も後からALT・JTEの複数で観点別のチェックする。



(3)まとめ

- 生徒がジャッジするのは難しい。生徒たちは勝敗にこだわり、次回どうやったら勝てるか話していた。
- 教員が後からビデオを見て評価をしたが、名前を言わないので誰かを特定するのが難しかった。

即興型ディベート研究報告集 PDA23-1

発行日 2023年8月4日

発行所 一般社団法人 パーラメンタリーディベート人財育成協会

大阪府堺市中区学園町1-1 大阪公立大学 工学研究科 機械工学分野 中川研究室内